海外協定校長期派遣留学報告書

氏名：澤井　優希

学部学科名：農学部 生物資源開発学科

留学先学校名：ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ・バンクーバー）

1.留学の目的

留学の目的は、自身の視野を広げ、人間的に成長することであった。

私は高校時代から長期留学に興味を持っており、大学入学当初から長期派遣留学の募集要綱や英語スコアの条件を調べていた。主に英語スコアの取得に時間を要したため、2 年次の冬に出願し、留学期間は 3 年後期から 4 年前期にかけての 8 か月間となった。

これまで、日本や日本にいる家族・友人たちと長期間離れて生活した経験はなく、海外で暮らした経験もなかった。そのため、日本語が通じない異国の地で生活することは、自身の視野を広げ、大きく成長する貴重な機会になると考えていた。

本派遣制度では、世界水準の教育機関であるブリティッシュ・コロンビア大学（以下、UBC）において、正規学生と同等の教育を受けることができる。また、UBC は総合大学であるため、自身の専攻外の授業も履修することができ、東京農業大学では学ぶことのできない分野の授業も数多く開講されていた。そのため、留学先として UBC を希望した。加えて、カナダは自然が豊かな国であり、英語を主要言語とする国であること（※一部地域を除く）も、留学先として希望した理由の一つであった。

2. 現地での生活について

（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）

住居は、キャンパス内にある Fairview Crescent という学生寮の 4 人部屋ユニットであった。それぞれの寝室は個室で、キッチン、トイレ、シャワーは 4 人で共有する形式だった。ハウスメイトは、イギリスからの交換留学生 1 人とカナダ人の正規留学生 2 人であった。初対面の人たちとの共同生活には多少の不自由さもあったが、互いに適度な距離感を保ちながら生活していたため、大きな問題もなく快適に過ごすことができた。

寝室にはベッドマット、机、椅子、ライトスタンドが備え付けられていたが、それ以外の家具は用意されていなかった。そのため、ベッドシーツや布団、枕、枕カバーなどは各自で準備する必要があった。私の場合、ベッドシーツは薄く持ち運びやすかったため日本で購入して持参し、それ以外の寝具は渡航翌日に IKEA で購入した。IKEA へは寮およびキャンパスからバスで行くことができるものの、乗り換えが必要で移動時間も長く、購入した寝具類を持ち帰るのはかなりの負担となった。一方で、学校側では寝具類を事前に部屋へ届けてくれるサービスも提供しており、多少費用はかかるものの、利用する価値のあるサービスだと感じた。

共用スペースには電子レンジ、冷蔵庫、コンロ、オーブンなどの家電は備え付けられていたが、食器や調理器具、調味料などは各自で用意する必要があった。食器や調理器具は基本的に自分で購入したものを使用していたが、ハウスメイトの了承を得た上で、時折共有のものを使用させてもらうこともあった。

Fairview Crescent はキャンパスの端に位置しており、反対側にあるビーチまで

徒歩約 30 分を要した。このように、UBC のキャンパスは東京農業大学と比べて非常に広く、どの教室へ行くにも 15 分以上歩くことが珍しくなかった。キャンパス内には飲食店や食料品店も多くあり、食事をする場所に困ることはなかった。一方で、食料品はキャンパス内で購入するとやや高価であったため、私はバスで約 30 分の場所にある比較的安価な八百屋とスーパーを利用して買い物をしていた。

キャンパスからダウンタウンまではバスで約 1 時間で行くことができる。キャンパス内にはバスロータリーがあり、多くの路線の始発・終着地点となっているため、さまざまな方面へアクセスしやすかった。移動時間は比較的長いものの、交通の利便性は高かった。また、UBC の学生は Compass Card という交通カードを利用しており、学期ごとに定額を支払うことで、その期間中はバスや電車を自由に利用することができた。Compass Card は現在のところ物理カードのみが発行されており、指定のドラッグストアや駅構内の券売機で購入する必要がある。ただし、カードを忘れた場合でも、クレジットカードを直接タッチすることで乗車できるため、不便を感じることはほとんどなかった。

留学生活の中で最も支えとなったのは、日本人の友人たちであった。1 人は、業務スーパーの奨学金面接で同じグループになったことをきっかけに知り合い、渡航前から準備について相談し合うなど、留学開始前から大変お世話になっていた。渡航後も困ったことがあるたびに相談に乗ってもらい、精神的にも大きな支えとなった。もう 1 人は、渡航後間もなく参加したオリエンテーションで知り合った学生であり、同じ業務スーパーの奨学金を受給していることが分かったことをきっかけに親しくなった。この 2 人とは 3 人で行動することが多く、全員が同じ 8 か月間の留学（Full year）であったことから、留学生活の最初から最後まで互いに支え合うことができた。

前学期には、授業で知り合ったカナダ人の正規学生とも親しくなり、一緒に授業を受けたり、その学生に誘われてキリスト教徒が集うサークルのイベントに参加したりした。また、寮で開催された交流イベントで知り合った正規学生や交換留学生とも親しくなり、その後も一緒に食事へ行ったり、旅行や軽いハイキングへ出かけたりするなど、交流を深めることができた。

旅行では、モントリオールとケベック・シティ、カルガリーとバンフを訪れた。モントリオールとケベック・シティへは、交換留学生のグループチャットで募集されていた旅行に参加し、ほとんどが初対面のメンバーとの旅行であった。カルガリーとバンフへは、交流イベントで知り合ったアジア出身の交換留学生たちと訪れた。ちょうど私の誕生日と重なっていたこともあり、現地で誕生日を祝ってもらい、多くの時間を一緒に過ごしながら交流を深めることができた。非常に思い出深い旅行の一つとなっている。

長期休暇には旅行へ出かけることもあったが、クリスマスや年末年始は寮で一人の時間を楽しみながら過ごした。カナダではほとんど自炊生活を送っていたため、自分の食べたいものを作り、ケーキを焼いたり、年越しそばやお雑煮を作ったりして、異国の地でも日本らしい年末年始やクリスマスの雰囲気を楽しむことができた。

留学生活では、楽しいことだけでなく、辛いことも数多くあった。しかし、そのような出来事を現地で出会った仲間と共有し、支え合うことができたことは非常に大きかった。また、日本にいる家族や友人も、電話や SNS を通じて相談に乗ってく

れたり、節目ごとに連絡をくれたりするなど、常に心の支えとなってくれた。

3. 留学を通じて学んだこと

留学を通じて学んだことは、大きく三つある。

一つ目は、海外でも自立して生活できるという自信を得たことである。私はこれまで、日本国内はおろか出身地を離れて長期間生活した経験すらなかった。そのため、一見すると難しそうに思える海外での生活も、実際に挑戦してみれば自分の力で生活することができるのだということを実感した。この経験を通して、将来の進路を考える上でも、海外で働く機会の多い職種を選択肢の一つとして考えられるようになった。

一方で、留学中には日本にいる同級生二人の訃報を受けるという出来事もあった。長期間海外に滞在していると、日本で不幸があってもすぐに駆け付けることは難しく、その悲しみを共有し、心から共感してくれる人も、日本にいるときと比べると決して多くはないという現実を痛感した。頭では理解していたつもりだったが、実際に経験すると想像以上につらい出来事であり、私にとって留学中の最も大きな出来事の一つとなった。

二つ目は、生態学や遺伝子学など、自身の専門分野に関連する内容を英語で学ぶことができたことである。講義だけでなく、現地でのフィールド実習を通して学ぶ機会にも恵まれた。キャンパスの近くにはPacific Spirit Parkという保全された森林があり、そこで行われた実習では、日本では経験できないような内容も多く学ぶことができた。東京農業大学では触れる機会の少ない分野についても学ぶことができ、専門的な知識だけでなく、多様な視点から生物学を考える力を養うことができたと感じている。

三つ目は、人とのつながりの大切さである。これは留学を経験した人がよく口にすることかもしれないが、場所に関係なく、自分のことを気にかけ、大切にしてくれる人たち、そして自分自身も大切にしたいと思える人たちの存在の大きさを、この8か月間で改めて実感した。孤独を感じたり、つらくて一人では耐えられないような気持ちになったりしたときも、そのような人たちが周りにいてくれたことで何度も救われた。

もちろん、常に誰かを頼ることができたわけではなく、日本との大きな時差もあったため、自分一人で問題を解決しなければならない場面も少なくなかった。しかし、そのような経験を幾度も乗り越えたことも、自身にとって大きな成長につながったと考えている。

履修した全ての科目で単位を取得できたわけではなく、8か月間を通して常に全力で走り続けられたわけでもなかった。それでも、自分なりに努力を積み重ね、多くのことに挑戦することができた。そして、カナダでの8か月間を乗り越えて帰国したという事実は、今後も私が胸を張って誇れる経験であり、自分自身に少しばかりの自信を与えてくれるものになったと考えている。

4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

留学を通じて学んだことは、大きく三つある。

一つ目は、海外でも自立して生活できるという自信を得たことである。私はこれまで、日本国内はおろか出身地を離れて長期間生活した経験すらなかった。そのた

め、一見すると難しそうに思える海外での生活も、実際に挑戦してみれば自分の力で生活することができるのだということを実感した。この経験を通して、将来の進路を考える上でも、海外で働く機会の多い職種を選択肢の一つとして考えられるようになった。

一方で、留学中には日本にいる同級生二人の訃報を受けるという出来事もあった。長期間海外に滞在していると、日本で不幸があってもすぐに駆け付けることは難しく、その悲しみを共有し、心から共感してくれる人も、日本にいるときと比べると決して多くはないという現実を痛感した。頭では理解していたつもりだったが、実際に経験すると想像以上につらい出来事であり、私にとって留学中の最も大きな出来事の一つとなった。

二つ目は、生態学や遺伝子学など、自身の専門分野に関連する内容を英語で学ぶことができたことである。講義だけでなく、現地でのフィールド実習を通して学ぶ機会にも恵まれた。キャンパスの近くにはPacific Spirit Parkという保全された森林があり、そこで行われた実習では、日本では経験できないような内容も多く学ぶことができた。東京農業大学では触れる機会の少ない分野についても学ぶことができ、専門的な知識だけでなく、多様な視点から生物学を考える力を養うことができたと感じている。

三つ目は、人とのつながりの大切さである。これは留学を経験した人がよく口にすることかもしれないが、場所に関係なく、自分のことを気にかけ、大切にしてくれる人たち、そして自分自身も大切にしたいと思える人たちの存在の大きさを、この８か月間で改めて実感した。孤独を感じたり、つらくて一人では耐えられないような気持ちになったりしたときも、そのような人たちが周りにいてくれたことで何度も救われた。

もちろん、常に誰かを頼ることができたわけではなく、日本との大きな時差もあったため、自分一人で問題を解決しなければならない場面も少なくなかった。しかし、そのような経験を幾度も乗り越えたことも、自身にとって大きな成長につながったと考えている。

履修した全ての科目で単位を取得できたわけではなく、8 か月間を通して常に全力で走り続けられたわけでもなかった。それでも、自分なりに努力を積み重ね、多くのことに挑戦することができた。そして、カナダでの８か月間を乗り越えて帰国したという事実は、今後も私が胸を張って誇れる経験であり、自分自身に少しばかりの自信を与えてくれるものになったと考えている。